

## 追 悼



## 石黒浩三先生を偲ぶ

東京理科大学理工学部 田 幸 敏 治

石黒浩三先生（元光学懇話会幹事長）は、77歳のお誕生日を目前に、去る6月14日逝去されました。例年のように今年の冬にもスキーに行かれたりして大変お元気でしたが、連休明けに一寸したと思われた風邪から抗生物質の効かないビールス性の肺炎で、「流れ弾丸に当たったよう」と御遺族の方が嘆かれた御災難でした。気早な先生が先行されたのを見失っただけのようで、亡くなられたのが信じられない気持です。

先生は昭和16年東京帝国大学理学部物理学科を卒業され、引続き木内政蔵先生の研究室で学究の道を進まれました。高校・大学時代に結核を患っておられましたので戦時中でしたが兵役には無関係でした。私が先生に初めてお目にかかったのは、昭和19年の秋で、東京に空襲が始まり、あわただしい雰囲気の中で学生実験の指導をしていただいたこと、さらに翌年の春に前橋市郊外の農家に一週間ほど泊りこみで麦刈の勤労働員に行った時の引率者としての記憶が残っています。敗戦後の混乱の中で卒業研究に木内・蓮沼研究室に入って以来今日まで、直接御指導いただくことになりました。

この時期に、半ば逆説的な表現だったかと思いますが、「もう光の物理にはすることがないなあ」と、ゼミの折だったかにいわれたことが、新人の私にはショックでした。先生が新しい光学の方向を模索しておられた時期であり、昭和28年に出版された共立全書「光学」の初版を執筆されていた頃でした。

新制大学の発足とともに駒場の教養学部へ移られていた木内先生が定年退官されるとともに助教授として着任され、3年間一緒に研究させていただきました。この時期の印象的な研究は、スミス・パーセル効果の実験的検証で、全くの手作りの装置でしたが、私にとっては本格的な実験の最初で、自信のようなものを感じさせていただきました。昭和31年に私は計量研に移ることになり

ましたが、石黒先生は桑原五郎先生と密接な関係の下に光物性の分野、特に固体プラズマを中心とした光実験物理の分野で、次々と輝やかな業績を上げられました。その詳細はここでは省かせていただきます。

本学会の前身である光学懇話会が昭和 25 年設立された時には初代幹事長の木内先生の下に文献抄録委員長として、さらに編集委員長、幹事長などと、常に会の発展の推進役を務められました。先生は几帳面に創設期から現代までの全資料を完全にファイルされていまして、生き字引きとして、学会の何年かの節目の時の特集号に、先生に執筆をお願いすると、正確な経過を書いていたことができました。

「光技術コンタクト」の光学教育特集号 I (1992年9月号) に10頁にわたって「光学教育50年の変遷」を書いていただいたのが、先生の最後の論文となりましたが、まさしく先生が大学を卒業された1941年からの先生の御活躍の50年間であったのです。

物理教育に関して、先生は日本物理教育学会での御活動のほか、特に中・高校での理科教育に種種の立場で協力され、活動されました。昭和30年頃からの、ともすると原理的・体系的な理科教育が重視されていくカリキュラムの中で、日常生活に密着した体験的項目、とくに光学では光の反射・屈折、レンズや色などの項目が消えて行った風潮に抗しきれなかったのを嘆いておられました。平成5・6年度から実施される最近の中・高校教科の指導要領でレンズなどが復活したのはせめてもの慰めであったと思います。

先生の東大御停年の最終講義も、物理教育に関する御研究でした。色々と工夫し、主に自作された、教壇での展示実験用の装置で、次々と実演してのお話でした。引続き、東京理科大学理工学部物理学科で、研究・教育に活躍されました。特に、この時期に TK 80 キットの発売を期にパソコンに熱中され、実験データの取込みや、計算への活用を試みられました。研究されていた液晶セル中での液晶分子の配向とコノスコープ像の変化との関係をシュミレーションするために、助手の山下氏とともに新しい展開を発表されました。

先生の学生指導については、「何か」を自分で完成してデータがとれることを期待するという方針でした。再停年の後も非常勤として、講義や、実験指導にお元気な御声を聴くことができました。農道を2輪車で来られてハラハラさせたり、学生の発表会でにこにこしながら基本的な鋭い御質問に、学生たちをドキりとさせたり、お元気でした。野田に移られてから、毎朝富士山が見えるかどうかの統計を毎年年賀状で見せていただいたことなど思い出はつきません。

謹んで先生のご冥福をお祈り致します。